

第4回

失敗しない大学院の選び方(下)

——群雄割拠

あお くに まさ やす
青谷正妥

京都大学留学生センター

イチローの最大の強みは、内野安打なのだそうです。学部
の成績も一流で、一流大学の大学院に進み、一流の先生につ
くというのが真芯に当てたピッチャー返しだとすると、今月
のお話は、野手のあいだに打って足で稼ぐ内野安打の打ち方
といってもよいかもしれません。ある種の掘りだしもの情
報、穴場情報です。

地方豪族

前回の注意事項のなかで「トップ校の無名の先生、下位の
学校でも高名な先生、そういう兼ね合いを考えねばなりません」と書きました。日本で“有名大学”以外にいる“有名な先生”というのと、どこかの有名大学を退官した名誉教授が相場
ですね。しかし、アメリカには「地方豪族」とでも呼ぶべき大
物が星の数ほどいます。その理由は国土の広さ以外に、

- 1)たとえ東京大学や京都大学であっても、しょせん日本の
なかのトップクラスの集まりにすぎないが、アメリカに
は世界中から優秀な学者や院生が集まってくるので、層
の厚さがまるで違う。
- 2)教授たちが勤務先の大学の名前を日本ほど気にしないの
で、条件さえよければすぐに移動する。

などです。一つ目については、移民をはじめ優秀な学者が多
すぎて、中央ではポストが足りないのが、必然的に分散する
物理的現象。二つ目については、日本ほどhierarchyが明瞭
でないことと開拓者魂が原因だという説明を受けたこともあ
ります。さらに、高給で有名な学者を買う、学者側もそれに
応じる、というconceptも普通ですので、たとえばoil dollars
が潤沢にあるテキサスの大学が大物のショッピングをすると

★
いった例もあります。地方大学にノーベル賞学者が平気でい
ることからも明らかのように、アメリカの学者の分布は、ま
さに群雄割拠状態なのです。

無名大学にいる高名な学者は、なかなかよい学生に恵まれ
ないので、日本の有名大学の学生などは大歓迎されることが
あります。しかも、研究費の獲得にも影響力があるので、
admission committeeに働きかけてくれる可能性もありま
す。僕が最初に行ったMaryland大学の化学科は、まったく平
凡な学科でしたが、全米に一つしかないというLaboratory of
Chemical Evolutionの名物教授が引く張ってくれたため、書類
をだしたのが年末だったのに、翌1月の春学期からTAつき
で入学を許可されました。僕はこれまでさまざまなケースを
見てきましたが、中堅以下の大学ではこういうことも案外あ
るようです。ただし、この場合の最大の問題は、その人しか
立派な先生がいないことで、期待はずれだったりすると、他
校に移るしか手はありません。実は、これがまさに僕の身に
起こったことで、3年間もいたMaryland大学からPrinceton
大学へ移らねばならず、とても残念でした。

兵隊のいない将軍

ところで、たとえ有名大学でも不人気な分野はあります。
たとえば物理学科で古典電磁気学をやっていて、工学系の応
用があるので金はあるが、モテなくて嫁(学生)の来手がない
先生とかもいます。こういう人は積極的に学生を入れようと
してくれるので、選考過程で有利になる可能性がでてきま
す。誰かが「自分が面倒を見る。奨学金も自分でだす」といっ
てくれると、たいへん有利です。アメリカの大学院は点数の

Your complete study abroad guide

順に入学できるシステムではありませんので、自分が何をやりたいかによって各大学院の難易度は大きく変化します。たとえばMITの物理は、大学院の規模が大きいためやや入りやすいとされていますが、それは実験系の話であって、理論系で入れる人はわずかです。上の古典電磁気学の例だと、たまたま自分のやりたいことが主流から外れていなければならぬので、万人向きの戦略ではないと思われるかもしれませんが、そこは発想の転換です。コツは場違いなところで場違いなことをやっている人を探すことで、なぜか工学部の化学で理学部のような理論化学をやっている人とか、動物学科だが内容はほとんど生化学の人とか、そんな感じです。学位の名前は化学の代わりに化学工学になったりするかもしれませんが、柔軟な姿勢が大切ということですね。

以上は人材の話ですが、学科や専攻という意味でもアメリカの層の厚さは圧巻で、ここでも柔軟な姿勢がpay offします。

賢い学科選択

日本より学科の数がはるかに多いアメリカでは、必然的に学科間で教育・研究内容が重なります。化学の研究の多くは、Agriculture, Environmental Science, Plant Biologyなど、より入りやすい学科でもできますし、たとえば生物学関係の統計学はDepartment of Statisticsでも、そこより入りやすいDepartment of Biostatisticsでも学べます。また、Computer ScienceよりはるかにやさしいInformation Management and Systemsというような名前の学科で同じ研究ができるといった例もあります。固体物理を専攻していた友人は、Physics専攻から大学院はApplied Physicsに進み、engineerのほうが多い環境で、理論物理がわかるというだけで皆に感心され、“It is perfect for my ego(優越感が心地よい).”と冗談半分とはいえ、ご満悦の態でした。

学際的専攻

今度は利口な専攻の選択です。Interdisciplinary(学際的)なものも含めると、Illinois大学では専攻が200を超えるそうですが、これは決して例外ではありません。当然ながら専攻間に研究内容の重なりができます。もちろん、Interdisciplinaryであるがゆえに高い人気と競争率を誇っているところも



MPPPMSCDISMSESM

学科や専攻の多さがそのまま学位の多さに直結するのがアメリカの面白さです。Ph.D.レベルでも工学博士・理学博士という大きな括りの代わりに、土壌学博士、化学博士、動物学博士と多様ですが、修士レベルの多様性は傑作です。

実は、表題は三つの修士号を繋げたもので、MPPPM = Master of Plant Protection and Pest Management, MSCDIS = Master of Science in Communication Disorders, MSESM = Master of Science in Engineering Science and Mechanics, またはMaster of Science in Environmental Systems Managementです。極めつけはもっと短いMAMで、僕が調べられただけでもMaster of Agriculture and Management, Master of Animal Medicine, Master of Applied Mechanics, Master of Arts in Management, Master of Arts Management, Master of Arts in Ministry, Master of Association Management, Master of Avian Medicine, Master of Aviation Managementと九つもありました。Master of Avian Medicine(鳥類医学修士)なんて、サイコーですね。

ありますが、なかにはただ単に研究費の取り分を増やすだけが目的でつくられた専攻もあるため、閑古鳥が鳴いていることもままあります。こんな裏事情はどこにも書いてありませんので、自分でresearchしなくてはなりませんが、いくつかの専攻に問い合わせると、向こうの応対で様子がだいたいわかるようになります。Interdisciplinaryな専攻では、さまざまな学科の教官のなかから指導教官を選ぶことができ、たとえばHarvard大学のChemical Physicsという専攻はDepartment of Chemistry and Chemical Biology, Department of Physics, Department of Astronomy, Division of Engineering and Applied Sciencesの有志がやっています。まるで取り見取りのbuffet(バイキング)みたいだと思いませんか？

では、「お行きなさい」。